

precio

医師、人、プレシオ。

CAPITALregion
NOVEMBER 2016
VOL.60 11

自然のなかで優雅に過ごす

LUXURY CAMP STYLE

欧米のリッチ層も魅了する「グランピング」

日本のグランピング・リゾート

アウトドアライフを彩るアクティビティー
「住宅の快適さ」モーターホームで行こう！

待望のダウンサイジングターボ
革新の急先鋒

新世代エンジンを搭載「LEXUS GS200t」

自動運転へ その最先端を駆ける
未来型セダン

フルモデルチェンジ「Mercedes-Benz E-Class」

Live Report 「ファンク50年史を体現する大御所」

日本の風景「桜田門——東京」

寅は猛なり——小説 吉田松陰

Doctors White Paper

医療の世界で生きる女性たち

precio



Doctors White Paper

医師は「医師」であると同時にひとりの「人」である。
多忙な日々の中で責任を全うし、
かつ自分の人生を輝かせる秘訣は、
その人のバイタリティにあり、とみた。



原点となつたドイツ留学

渋谷から私鉄で15分ほどの駅で降り、スープ・マーケットや飲食店が軒を連ねる駅前商店街を抜けると、目の前に近代的な5階建てのビルが現れる。そこは、成功率100%に最も近い心臓外科医として、TVなどで紹介される機会も多い渡邊剛さんが2014年に立ち上げたニューハート・ワタナベ国際病院だ。

彼の率いるチームの手術成功率は世界トップレベルの99.7%。そのチーム・ワタナベが注目されるのは、優しい手術ばかりを選んで受けているのではないということにある。そこには執念と最先端技術があった。渡邊さんは東京・府中で生まれ育った。医師の道を選んだのは中学生の頃に出逢った凄腕の外科医『ブルック・ジャック』（手塚治虫による漫画作品）に感銘を受けたからという。

金沢大学医学部を卒業後、ドイツ・ハノーファー医科大学に留学。2年半の臨床留学中に約2000件にもおよぶ心臓手術を経験し、日本人としては最年少で心臓移植手術を成功させ、移植執刀医としてその名を世界に知らしめた。

「2年半で2000件というのはもちろん助手として入った手術も含めての件数ですが、当時の日本では考えられない数です。でも、向こうでは特別なことではなかつたんですよ。心臓手術が1つの手術室で2～3件同時進行し、日本では8時間かかる手術も2時間前後で次々と

最先端の手術支援ロボットで心臓疾患に立ち向かう 「成功率 99.7% の心臓外科医」

文／プレシオ編集部 写真／平野敬久 取材協力／ニューハート・ワタナベ国際病院

帰国後、渡邊さんは多くの術式を開発して金沢大学や東京医科大学の教授などの要職に就く。しかし、「もつと速くきれいな手術をやりたい。そして病院は常に患者さんにとつて世界で一番の存在であるべき」——そんな理念に徹した病院を自らつくりたいとの思いも日増しに強くなつていった。でも、世間はそう甘くはない。なんと開業まで15年以上の時間を費やすこととなる。「最も苦労したのは資金調達です。私はお金に縁がなかつたから（笑）」。その間、ITバブル崩壊やリーマンショックなどが日本経済

終わっていく。しかも患者さんはあつという間に退院していく。これは日帰りの心臓手術も夢ではないと本気で考えました」

留学時の経験を手繕り寄せるように丁寧に話してくれる渡邊さん。日本とドイツの病院とでは何が違つていたのかを聞くと、「難しいことでなく簡単な理由ですよ。まずは技術の差、そしてやり方がまつたく異なつていました。医療の世界は日進月歩、つまり当時の日本は遅れています」。

世界最高レベルの技術を習得し、そのペースにも慣れた彼は、1日5件の執刀も普通にこなせるまでになつていった。この留学で得たことが、短時間のきれいな手術で早く完治させるというその後の指針にもなつている。

「あきらめない」最高のチーム

まずは渡邊さんがその腕を認める最高のメンバーでチームを組んでいます。しかも常に同じメンバーで手術に挑める環境作りに成功している。それは心臓外科の医師だけではない。血管外科や麻酔科の医師、看護師、臨床工学技士、事務方までもが、金沢や東京の大学病院で渡邊さんとともに難手術を乗り越えてきたメンバーで構成されているのだ。

そしてもうひとつが、世界最先端の手術支援ロボット『ダ・ヴィンチ』だ。この遠隔操作型の内視鏡手術装置は、たとえば1ミリの血管が縫えるほど精密で、とくに奥の深い細かい作業で威力を發揮する。この装置を使うことによって、弁膜症などの手術も胸部に4つの穴を開けるだけでできるから、手術中の出血量も30～50ccで済むそうだ。開胸した場合とは比較にならないほど少なく、これは患者さんの早期回復にも絶大なる効果を發揮する。

いま渡邊さんは年間400件以上の手術をこなし、前述のとおり成功率99.7%を実現している。彼が執刀医として手術前にスタッフに話すことはいつも同じだ。

「このチームでやるからにはあきらめずに必ず成功させよう」とスタッフに聞くとその執念にはいつも敬服させられるし、彼と手術室に入ると緊張感が増すという。

「今後の目標ですか？」とにかく今日の手術を一生懸命やることですよ。自分が患者さんのためでできること、それは手術しかないですから。カッコいい話しきはできないけれど、やっぱりそういうことになるのだと思いまます。ぶれないで自分の信じる道をまっすぐに行く。ブラック・ジャックのようになりますよ（笑）」

PROFILE

渡邊 剛 Go Watanabe

1958年東京都府中市生まれ。金沢大学医学部卒業後、1989年にドイツ・ハノーファー医科大学心臓血管外科に留学。32歳で日本人として最年少で心臓移植手術を執刀し移植執刀医となり活躍。帰国後、日本初となる人工心肺を用いないOPCABを成功させ、41歳で金沢大学心肺・総合外科の教授に就任。2005年には日本人として初めて手術支援ロボット『ダ・ヴィンチ』での心臓手術を行い成功。東京医科大学心臓外科の教授などを歴任後、2014年にニューハート・ワタナベ国際病院を開業。



【左上】手術支援ロボット『ダ・ヴィンチ』を操る渡邊さん。【右下】渡邊さんが立っている後ろでは手術が行われている。実は病院の1階にある手術室はガラス張りとなっており、患者家族などが手術のゆくえを見守ることができるのだ。また設置される大型モニターにも腹部の映像が映し出される。【左下】ニューハート・ワタナベ国際病院は2つの手術室と43のベッド（すべて個室）を備える。心臓外科の他、血管外科、消化器外科、呼吸器外科、甲状腺外科などもあるのでスタッフの数は100人を超える。総長を務める渡邊さんは、東北などにさらに2～3つの病院をつくりたいと壮大なプランも話してくれた。ところで、渡邊さんは奥さんと子供5人（11～21歳）、そして愛犬2匹の大家族。「とにかく食事の量がすごいから。買い物は大仕事ですよ」と笑う。

